

木曾三川の恵みのもとで

漁場と漁業の変化

赤須賀漁業協同組合組合長 秋田淳吉



赤須賀の漁業は木曾三川の流れと伊勢湾が生み出す自然の恵みに支えられてきました。

太古から続いてきた自然の恵みが、この数十年で人の手によって大きく変わり、海は私たちに幸をもたらしてくれなくなってきたのです。

その移り変わりを目の当たりにしてきた者にとって、今できることは、この歴史を伝え、滔々としてきた自然の恵みを少しでも取り戻すことではないでしょうか。

干潟からの恵み

漁師町・赤須賀の四五〇年に及ぶ歴史の中で、さまざまな漁の変遷がありました。長い歴史の中のことから、時代に応じて変化していくのはもの道理ですが、しかし、終戦後、昭和三〇年代以降は、漁具や漁船ばかりでなく、漁場の環境においても、これまでにない急激な変化を示しました。



昭和二八年に私が漁師になった頃は、専業漁師が五〇〇人ほど。昭和二六年の記録では六二〇人となつています。現在は一五〇人ほどですから、この

狭い赤須賀に四倍もの漁師がいたこととなります。

当時は木曾三川の河口部には、広大な干潟がすつとつながっていました。そしてこの干潟の恩恵を十分に受けて多様な漁業が営まれていました。分類すると、当時の漁業種は十二種。その八、九割が魚を獲る漁業でしたが、このあと急激に衰退していったのです。



漁場環境の激変

その原因は防潮堤、干拓、干潟の埋め立てなどで海と河川環境の変化があります。相次いだ名古屋港防潮堤の建設や港湾用地の埋め立てによって、潮流が大きく変化し、干潟漁場が消滅していきました。

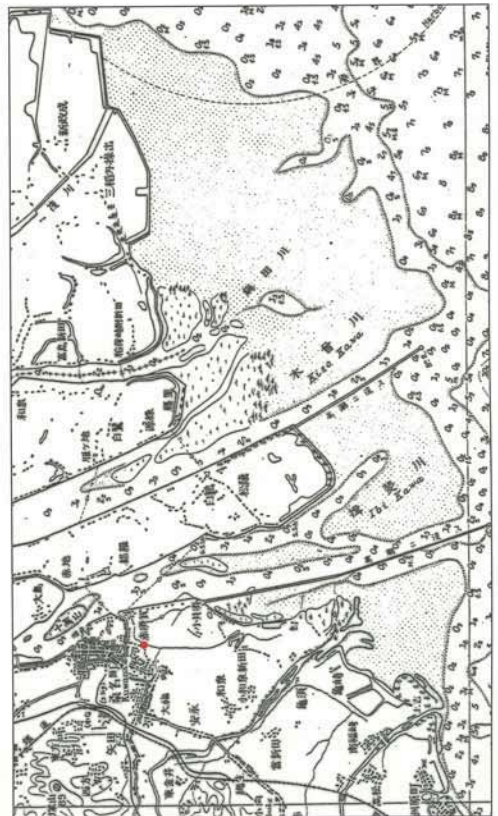
また、昭和四〇年代になると、地下水の取水により、木曾三川下流域に大規模な地盤沈下がおこり、川越地先の埋め立てによる潮流の変化、木曾岬干

拓の造成などの影響も受け、大切な漁場である干潟が消滅していきました。

そしてもう一つは、海の汚染です。

昭和二六、七年から始まった木曾川上流の製糸工場からたれ流された工場廃液は、黒い水、と呼ばれ、漁業に大きな被害を及ぼします。さらに、昭和三三年に操業開始した四日市コンビナートから排水された工場廃液により、いわゆる「異臭魚事件」がおこりました。カレイを獲ると油臭い、十匹に一匹これが混じつていればもう商品になりませんでした。

こうして魚の漁業は急激な衰退をみることになったのです。しかし、木曾三川の水量的にも豊富で、流れてくる良い水のおかげで、ノリ、ハマグリ、シジミへの転業によってなんとか持ちこたえることができたのです。



水路部発行海図「伊勢海」より
沿岸に干潟が広がっていたとわかる。(昭和五年二月発行)



現在の木曾三川河口周辺の様子

壊滅の危機に

ところがこれも長くは続きませんでした。昭和五〇年代から六〇年代にかけて、木曾川大堰の運用開始により河川流量が変わり、川越火力発電所の稼働によって海水温度に変

化が見られるようになります。また北勢流域下水道が稼働しはじめて、水質に変化が見られるようになります。

さらに平成に入ると長良川河口堰の本体工事や浚渫工事によって、漁場が減少し、運用が始まると潮流と水質に大きな変化が起こります。川越火力発電所の三・四号機の稼働後はさらに海水温度が変化しています。

昭和四〇年代には年間三〇〇〇トン獲れていたハマグリが、五〇〇〇トンと減って、平成七年からは一〇〇トンになりました。

このような港湾施設の整備や埋め立て、その理立地に建設された工場からの廃液や温排水の影響により、多様な生き物たちが消え、それとともに漁業

も姿を消していったのです。

先祖からもらった財産

昭和二〇年代、赤須賀の海には広大な干潟がありました。経済発展がやってきて、物質的な豊かさを求めるあまり、海の浄化能力を上回る開発を認めてきました。二〇兆円を超す工業生産高、それが必要なのはわかります。しかし、その中で起きていることも考えなければなりません。

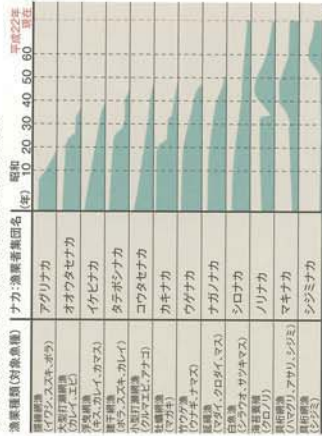
漁師がそこで生きているということだけではありません。たった四〇年前には、川で、前浜で、毎日毎日見かけ

た生きとし生きるものが絶えようとしています。

漁師の生き方はそれぞれいろいろあるでしょうが、漁師はありがたいと思うことがあります。赤須賀の漁師の教も減りました。しかし「海を守る」「先祖からももらった財産を次の世代に受け継いでゆく」という精神的なバックボーンが、この町にはまだまだ生きています。私の祖父の世代によく言われた言葉です。

「漁師はなあ、金も持たんと、肥料(こま)もやらんと、ひとりでに湧いてきたものを獲らしてもろとるんや。ご飯食う以上の、生活する以上の、魚は獲るなよ。そうと守るとれば、いつまでも続くでな。今になってこの言葉の重みを感じています。そして、昔の人のほうが資源管理に対しても、環境保全に対しても、意識が高かったと思うことしきりです。」

赤須賀地区の漁業者集団の変遷



できごと

昭和三〇年代

- ・四日市コンビナート工場廃液による、異臭魚被害
- ・木曾川上流製紙工場廃液による黒い水被害
- ・名古屋港防潮堤、港湾用地理立などによる潮流の変化と干潟漁場の消滅

昭和四〇年代

- ・木曾三川下流域の大規模な地盤沈下による干潟の減少
- ・川越地先埋立による潮流の変化
- ・木曾岬干拓造成による干潟漁場の消滅

昭和五〇年代～六〇年代

- ・木曾川大堰運用による河川流量の変化
- ・川越火力発電所一、二号機稼働による海水温度の変化
- ・北勢流域下水道稼働による水質の変化

平成時代

- ・長良川河口堰本体工事、浚渫工事による漁場の減少
- ・長良川河口堰完成運用による潮流水質の変化
- ・川越火力発電所三、四号機稼働による海水温度の変化

貝を増やそう

自然に支えられた
永遠の営みである漁業を
次代につなげることは
人間の生きる環境を
守ることもつながります。
赤須賀で取り組んできた
資源を守る活動を紹介します。



漁業を取り巻く状況

日本の漁業は、漁場環境の悪化による漁獲量の減少、輸入水産物の増大、流通面での大きな変化などによる漁価の不安、収益面での不安定さによる後継者不足など、先行きがた



いへん不安視されています。赤須賀では、ハマグリ、シジミ、アサリを対象とした採貝漁業やシラウオ漁、クロノリ養殖がおもに行なわれています。その中で三〇年以上も前から貝類の資源管理対策として、全国でも例を見ないような出漁週三日制や、一隻あたり漁獲数量制限を行ってきました。また、ハマグリの種苗放流、シジミの移動放流、アサリの放流などの資源を増やす取組を行なってきました。しかし、労多くしてまだまだ結果が少

ないのが現状です。四五〇年もの昔から続き、日本の食文化にも貢献してきたと自負する赤須賀漁業の存続には、これらの努力をさらに積極的に続ける以外に道はありません。そして、その取組を漁師たちだけではなく、多くの皆さんに知っていただくことが大切であると考えています。

資源回復への取組

赤須賀では昭和三〇年代を境に魚類漁船漁業が衰退し、貝類漁業への漁業者の参入が増えた結果一時的に漁獲量は増えましたが、貝類資源は減少していきました。ハマグリ資源が激減した昭和五〇年代に、資源の増殖、生産対策が強く望まれるようになり、県、市、漁協が対策を協議した結果、ハマグリの種苗生産の可能性について技術開発をし、実用化に向けて推進することとなったのです。県の紹介により、昭和五一年、五二年に的矢湾養殖研究所にハマグリの人工採苗技術開発を委託し、ハマグリの



種苗生産に成功。一〇、一二ミリメートルの稚貝二二〇〇個を掛巻長良川河口に放流したのが、人工種苗放流の始まりであり、漁協としては全国で初めての取組でした。その後も人工繁殖技術の習得改良に努め、組合内に研究会を発足させて昭和五三年以後は、人工授精から一貫した種苗生産に取り組み始めました。さらにハマグリに適した飼料用のプランクトンの選定、温度・水質管理手法等、数々の試行錯誤を繰り返して、稚貝の大量生産に成功するようになりました。



出漁・漁獲規制の取組とともに、このような増殖への取組が行われてきた結果、その成果がようやくあらわれ、復活の兆しが見られつつあります。

市民につながる試み

高度経済成長期以後、漁業に大きな

影響を与えるさまざまな開発事業が押し寄せる中で、反対運動に取り組んできました。しかし、結果においてすべてと言っていいほど、私たちの運動は敗北しました。それは、私たちの力がおよばなかったというだけではなく、私たち漁師から、漁師でない人たちへア



ピールするところが足りなかったことも理由の一つと感じました。私たち漁師の思いをわかってくれる仲間がいなかったのです。そこでここ

十数年来、赤須賀でどうい漁業をしているのか、多くの方に知っていただくという活動を続けてきました。赤須賀で獲れる魚介類を美味しくいただくことや、漁業を実際に体験していただくこと、そして海につながる山の人たちとの交流を続けています。赤須賀のファーム、漁師のことを心の底から理解してくれる仲間をたくさん作ることに取り組んでいます。



- 昭和五八年 蛤稚貝二五〇万個の生産に成功し放流する
- 平成元年 ハマグリ種苗生産施設竣工
- 平成二年 種苗生産施設で本格的なハマグリ種苗生産開始
- 平成五年 城南沖人工干潟造成、干潟への放流始まる
- 平成六年 長島沖人工干潟造成及び放流生残追跡調査始まる
- 平成九年 種苗生産施設専任職員を採用
- 平成一二年 干潟で蛤生育し漁獲制限を一日一〇kgから三〇kgに増やす
- 平成一六、一八年 アサリ稚貝を約一〇〇t放流
- 平成一九年 蛤漁獲量が年一〇〇tを超える